CONTENTS

page.1

園長コラム 長い人生の中での学園生活 ―― 園長　山之内 洋

page.2

信楽学園の製品はどこに？ ―― 今澤 幹生

野外活動について ―― 平林 采

演劇発表会 ―― 流石 幸訓

page.3

他県の児童相談所から見た信楽学園 ―― 愛知県中央児童・障害者相談センター 長谷川 国大

フレッシュさん ―― 今村 拓生・中島 和彦

瑞宝太鼓オンラインワークショップ ―― 杉本 紗弓

page.4

東京演劇集団 風 ―― 園長　山之内 洋

職員の宝もの ―― 芝田 春香・重田 直美

編集後記 ―― 安藤 宗純

ほほえむちから glow

社会福祉法人グロー

滋賀県社会福祉事業団と
オープンスペースれがーとが
ひとつになりました

園長コラム　長い人生の中での学園生活

コロナ禍で大変な一年。まだまだコロナとの付き合いは続きます。学園も異例の一年でした。３年目児童の修学旅行は中止、野外活動（登山）は町内での活動に、外出などによる社会体験プロジェクトも実施を大幅に縮小する一年でした。先日行われた演劇発表会も保護者限定の無観客での実施となりました。

そんな一年間を振り返り、改めて学園で過ごしている児童たちの学園での生活のことを考えてみました。

これまでのニューズレターでも再三紹介してきましたように、学園に在籍する児童たちの取り巻く環境や背景がこの１０年の間に大きく変化してきました。この数年間の間にも学園での３年間を待たずに退園していった児童たちが数名います。いずれも学園での生活の中で、居場所を失ったり、他児との関係で集団生活を送ることが難しくなったり、または児童施設という枠の中での生活の中での息苦しさや学園で生活、活動することの目的が持てないことなどの理由から退園していきました。

その後の彼らはアルバイトや就職先を見つけ、自分なりに暮らしています。女の子を出産し、母親になった子もいます。一方で、卒園後に社会生活を充実させている児童たちもたくさんいます。就職した会社になじめずに退職する児童もいますが…。

そこで、彼ら彼女らにとっての信楽学園での生活がどのようなものだったのか、長い人生の中でどのような意味があるのだろうか？私自身と照らし合わせると、中学高校時代のことを振り返ると、楽しいこともつらいこともあったかとは思いますが、生活する場所が施設という特殊な場所でなかったこと、高校や大学進学など進路について最終的には自分自身で決めていたことなど、彼らよりは窮屈感はなかったように思います。そんな窮屈感を持ちながら学園での生活を継続させるには何らかの目的・目標がないとしんどさだけ、無意味に時間だけが過ぎていくといった何らかの喪失感が残っていってしまいます。同じ年の児童は就職先を決めていく姿を横目に自分自身の立ち位置を振り返り、言葉にならない葛藤が沸き上がってくるのかもしれません。中学卒業と同時に施設での生活を余儀なくされ、様々な葛藤を持ち、『障害』というレッテルの中、自分はそうじゃない、でも様々な場面でしんどさを感じています。

そんな児童たちには、社会生活を送る上での猶予期間がありません。すぐに社会に飛び出さないといけない児童が多くいます。いわゆる「親のすねかじり」ができる児童が少なくなってきています。卒園後、退園後の数年間、20 歳代半ばあたりまでの期間のフォローがとても重要になってきています。地域の支援機関（学園から次の応援団）と関係が作れる児童はいいのですが、様々な理由で

そのことが難しい児童には、信楽学園が彼らの中での拠り所になっているのです。

卒園後、退園後もアフターフォローを充実させ、彼ら彼女らの長い人生の中、もうしばらく寄り添っていけるようにしていきたいと考えています。在園中についても残すべき伝統と新たな取り組みとをうまく組み合わせて「令和の信楽学園」を作っていきたいと感じています。

この春もまた児童が学園を巣立っていきます。　【園長　山之内　洋】

信楽学園の製品はどこに？

Where did the products we made go?

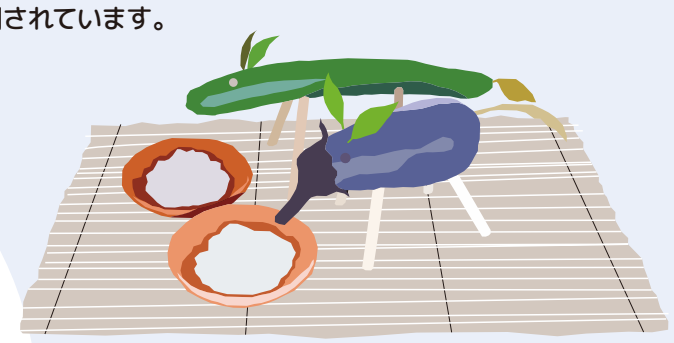
ぐい呑み（黒）は？

滋賀県東近江市八日市に本店のある日本料理の店「招福楼」さまへ。
学園で作成した黒色のぐい呑みをお弁当の小鉢として使用して頂いています。
写真は新宿伊勢丹にある「招福楼　伊勢丹店」で販売されているお弁当です。
お弁当を購入されたお客様がそのままご自宅などで使用されるようです。

「十二ヶ月風流弁当」▲
招福楼　新宿伊勢丹店

かわらけは？

静岡県にある加藤製陶さまへ。
年間約 10,000 枚の納品を行っています。加藤製陶さんから市場や葬儀屋などに卸売りをされています。「かわらけ」は、お盆の時期にお供物を置くものとして使用されています。



汽車土瓶は？

現在は信楽駅、リニア博物館さまで販売を行っています。
約 10 年前に復刻した汽車土瓶。
信楽駅では、中高年の方々が、「懐かしい」と言い購入されている方が多いようで、昔を思い出し、懐かしんでいただける事に嬉しく思います。他にも、会社のイベントでお渡ししたいなど、景品としても重宝して頂いています。

ぐい呑み（波）は？

滋賀県米原市にある「お弁当の井筒屋」さまへ。
観光で来られる団体客への提供や、葬祭などの仕出しとして販売されています。

学園で作成した「ぐい呑み」は3段の波模様を付けた専用のぐい呑みです。写真は団体様向けの松花堂弁当です。そのお弁当の小鉢として使用して頂いています。

井筒屋「松花堂」▲

野外活動について

例年であれば宿泊でおいしいご飯を食べて 2000m 近くの山を登り、帰りの温泉で疲れを癒すなど、非日常的な時間をみんなで過ごすことをしていました。しかし今年度はその通りに行かず、いつも練習している笹ヶ岳を本番地として登山する１日と、園内での余暇活動として「お楽しみ会」をする１日と、２日に分けて野外活動を実施することとしました。

本番までに足慣らしの練習をしていますが、雨で中止になることもありました。本番の天気も心配されましたが、今までで１番良く、みんなの日頃の頑張りを後押ししてくれたようでした。登山時は足が止まる、「もう無理…」と弱音を吐く児童もいましたが、全パーティが無事に山頂に着くことができました。登ったときの達成感や喜びはしんどさより大きいものだったと思います。

余暇支援では、お好み焼きや BBQ、射的やストラックアウトなど食べる・遊ぶの模擬店を職員で運営し、子どもたちが自由に食べたり遊んだり、なかには模擬店を手伝ったりして楽しんでいる児童もいました。思い出旅行（修学旅行）に行けなかった３年目も参加し、体育館にはみんなの笑顔が充満していました。最後のビンゴゲームでは、賞品目当てにみんな必死になっていました。コロナ禍での行事でしたが、子ども達にも職員にも印象に残る１日になったと思います。

職員は、この日を迎えるまで何度も会議を重ね、その度に「コロナやしどうする？」との言葉があり、嫌になるときもありました。またコロナ禍でも何かできないか？と新しいものを模索する、今までしたことのないことも求められました。その結果お楽しみ会を計画することになりましたが、ぎりぎりまで上手くいくか不安しかありませんでした。

職員のみで日帰り登山として事前に２時間半かけて登った努力も計画も白紙になったときは辛かったですが、２日間の野外活動が終わった後のみんなの笑顔やきらきらした表情をみて、いろいろありましたが企画して本当に良かったと感じることができました。

【平林　采】

登山の一日

お好み焼き

食べたり飲んだり

遊んだり

演劇発表会

今年度の演劇発表会は、新型コロナウイルス感染症が拡大している状況を受け、健康・安全面を第一に考慮した結果、来場者を各児童の保護者２名までと制限しての開催となりました。今回は、児童アンケートで希望の多かった「シンデレラ」を題材とした「てっくとっくのシンデレラ」に取り組みました。

現在の社会情勢を反映させたシンデレラにアレンジさせた「てっくとっくのシンデレラ」は、流行り病でステイホームを強いられている王国の王子さまが「てっくとっく」という仮想の動画の SNS サービスを使ってシンデレラを見つけ、家来たちがお城に迎えるというあらすじとなっています。

SNS サービスについては、子どもたちにとっては、ネットいじめの標的になったり、性犯罪者に目を付けられてしまったり、プライバシーの侵害やなりすまし犯罪の被害に遭う危険性があります。

他県の児童相談所から見た信楽学園

愛知県中央児童・障害者相談センター

私と信楽学園さんとのご縁は平成30年度の冬でした。
芯まで冷えるような「寒さ」は愛知県では体験したことないので、子どもと宿泊体験をした時は、正直暖かい地域の方が良いのでは？と不安になったほどです。取り組みも実に独創的？で、「土」をとおして子どもを成長させていく支援方法には驚きを隠せませんでした。

愛知県の障害児入所施設は基本的に特別支援学校へ行くことが前提です。そのため、施設が日中活動の支援をすること自体新鮮なものでした。「地域」にも根差しており、町内実習の受け入れや演劇発表にソフトボールなど社会とつながりが多く、山あいなのに開かれた施設だなと感じています。そのためか子どもも窮屈な環境ではなく、のびのび生活できているように感じました。それに加えて「食事」が美味しい。子どもに会いに行っているのか、食事を楽しみにしているのか・・・。結果的に良い時間を過ごさせてもらっています。

そして最後になりますが「人」ですね。とにかく暖かかったです。
他県から来たにもかかわらず優しく受け入れてくださったこと、忘れません。子どもの居場所をありがとうございます。最初は寒さで臆しましたが、今になれば本当にお世話になれてよかったなと感じています。担当の先生をはじめ多くの人に支援してもらい、その熱意を糧に成長する子どもを毎月みられて最高でした。来年度は、子どもも自立の年となります。支援者として一層頑張らなければいけないタイミングですが・・・引き続きお力を借りつつ、ご指導も含めてよろしくお願いいたします。

愛知県中央児童・障害者相談センター
児童相談課　児童福祉司　　長谷川　国大

いまむら　たくお
今村拓生

12月より信楽学園で児童支援員として働いております今村です。グローに勤めて6年目で今までに高齢者や救護施設等で生活支援をしてきました。
今回初めて児童と関わり、支援を行うこととなり、成長という場面に期待をしております。その中で私自身も共に成長できればと感じています。
信楽学園と言うと座学で歴史的背景の学習をしてきましたが、いざ働くとなると座学とは違う観点で貴重な経験が出来ています。フレッシュな子供たちの秘められたパワーを引き出せる職員となれるよう努めてまいりますのでご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

フレッシュさん

なかじま　かずひこ
中島和彦

私は元々、一般企業で働いていましたが、現在活動している演劇活動を通して色々な障がいや病気を持った沢山の人達と関わる様になり、転職しました。以前はA型事業所に勤務していた経験もあり、今までの経験を生かして支援がして行ければと思っています。
私が一番大事にしている事は『あいさつ』です。そして『相手を思いやる事』。人はつい、見た目の行動や言動で先入観を持って接してしまいがちですが、話をしてみると間違いだったと気付くことが往々にしてあります。
まずは相手を思いやる心を持って相手と接することがいかに大切かということを知り、その為には如何に自分と向き合う必要があるかという事を伝えて行きたいです。

瑞宝太鼓 オンラインワークショップ

前回号でお伝えした通り、1年目12名を対象に演劇発表会で演奏することを目的とした瑞宝太鼓オンラインワークショップを5回開催しました。まず始めに学園内のみでオリエンテーションを行い、DVDを使って瑞宝太鼓とは何か、オンラインワークショップとは何かなど今回の催しの意味を伝えました。

瑞宝太鼓の方と初めてZOOMで繋がった初回は、児童たちにとってオンラインという初めての環境で、パソコン画面を見るのかスクリーンを見るのか…どの画面を見てよいか分からない状態でした。太鼓に慣れるということで構え方や叩き方を教えてもらいましたが、太鼓もオンラインも経験したことがないため、戸惑ったり恥ずかしがったりしていました。

2回目以降は慣れていき、瑞宝太鼓の方とコミュニケーションを交わしたり、スムーズに練習できるようになりました。初めて発表曲の“紅蓮華”に合わせて太鼓を叩いた時は順調に進みましたが、1ヶ月後にはリズムを覚えていない児童が多数いました。そのため職員は次回までリズムを覚えておくことができるのか不安が残ったため、DVDを見て、リズムを思い出してもらう機会を作りました。そのかいあって、リズムを忘れないままワークショップを行えましたが、新たに先生の見本がないと上手くいかない所があり、1曲見本なしに叩ききることができるのか課題が浮き彫りとなりました。最終回は発表まであと4日と迫っていました。

職員は見本なしでは上手く演奏できないのではないかと不安に思っていましたが、児童たちの体にはリズムが叩きこまれたのか、見本がなくても演奏ができるようになっていました。職員は児童たちのスキルの高さに驚きました。

そしていよいよ本番。
緊張や不安な面持ちで舞台袖に準備する児童たち。幕が開いた瞬間、全員の表情が引き締まっており、会場にも緊張が伝わってくるほど緊張感に包まれていました。演奏が始まるといつも以上に叩く力が強く、声かけは練習以上に大きい声が出ており、気合が入っているのが伝わってきました。
また職員も気合が入っており、照明の演出にとてもこだわりました。“紅蓮華”をイメージとした赤色をモチーフにし、各個人に照明を当てるタイミングなどワークショップ担当と照明担当と念入りに打ち合わせをして本番に望みました。

演奏終了後は安堵した表情と共に達成感に満ち溢れていました。鑑賞していた職員や保護者は迫力や一体感に感動し、涙を流す方もおられました。先輩たちからも「やりたかった」と声が挙がるほど、いい舞台作品を作り上げた1年目。多くの児童が「太鼓をしてよかった」「思い出になった」と言ってくれました。

ワークショップ担当者は、練習から本番までを見届けているため、練習で課題とぶつかりながらも本番はビシッと決めてくることにとても感動しました。心の底から「やってよかった」と思え、仕事の喜びを感じられたのも事実です。児童たちのひたむきに取り組む姿勢はとてもかっこよく、彼ら彼女らにとって忘れられない経験となったのではないでしょうか。
瑞宝太鼓とのワークショップを通して学んだ喜び、達成感、協調性、努力することを忘れずにいてほしいと思います。

【杉本　紗弓】

一方で、新型コロナ感染予防に関連した社会的な大きな構造変化のなかで、オンラインによる繋がりやサービスは、逆に言えば、今まで触れることが難しかった情報、芸術、サービス、教育にアクセスしやすい状況を生み出しています。
距離などの環境的要因や障害などで体験することが難しかったことについてもアクセスできる時代となっています。

当日は、新たな取り組みとして今年度取り組んできた和太鼓の演奏の後、「てっくとっくのシンデレラ」を上演しました。子どもたちは、このような状況にも関わらず、それぞれが、一生懸命に練習に取り組み、成果を披露してくれました。
観客を制限するという形の発表会は本当に残念でしたが、来年は多くのお客様の前で披露できることを願うとともに、このコロナ禍を契機として障害の有無に関わらず、可能になった社会資源へのアクセシビリティが生み出す新たな価値が反映されていくであろうとわくわく感を感じています。

【流石　幸訓】

令和２年（2020 年）９月 18 日、
普段は児童たちがバスケットボールや卓球などのスポーツを楽しんでいる学園の体育館が芸術シアターに様変わりしました。

前日の午後から体育館で仕込み作業が行われ、当日体育館へ来てみると、そこは全くの別空間で、職員をはじめ児童たちはびっくりしていました。

東京を拠点に全国各地で公演活動を行っている東京演劇集団風の皆さんによる「ヘレン・ケラー～ひびき合うものたち～」を上演していただきました。信楽学園の在籍児童と職員のためだけに、旅公演の合間を縫って、わざわざ信楽に立ち寄っていただきました。

この「ヘレン・ケラー」というお芝居は、「奇跡の人」を原作としてのお芝居ではなく、新たなコンセプトとして作られたお芝居です。その制作に携わったのが当法人の北岡前理事長でした。その関わりの中で、一昨年から本物の演劇を目の前で、かぶりつきで児童たちに見せたい、見てもらいたいという思いから打ち合わせを重ね、今回の上演につながりました。今回の上演を児童たちがどのように感じ、受け止めてくれるのかは ↗

↘正直楽しみでもあり、不安でもありました。特に障害受容が出来ていない児童にとって障害者を主人公にしたお芝居はどう映るのかなど不安でいっぱいでした。

しかし、上演中驚くほどの集中力でお芝居に見入っていた児童みんなの表情がその不安を一掃してくれました。個々それぞれの感じ方で楽しんでくれたようでした。

今の時代、テレビや映画、ネットでの動画配信などいつでもお芝居などが見られる環境がありますが、今回の演劇鑑賞はとても意義深い時間だったなと感じています。演劇を通して、＜相手に何かを伝えること、伝え方、相手から伝えられたことをどう受け止めるのか＞などをこれからも児童職員共に学んでいければと願っています。　【園長　山之内　洋】

信楽学園のみなさん、お元気ですか。

昨年9月、みなさんの体育館で『ヘレン・ケラー～ひびき合うものたち』を上演しましたね。みなさんと過ごした時間が今も鮮明に心に刻まれています。くすくすと笑い合う声、はっと息をのむ様子、会場全体から真剣な瞳が注がれ一体となる瞬間、そして屈託なく公演後に俳優と話して、舞台に触れてくれたこと。飾らない、気取らない、原石のようにキラキラしたみんなの姿と、心を交換する時間がとても楽しかったです。

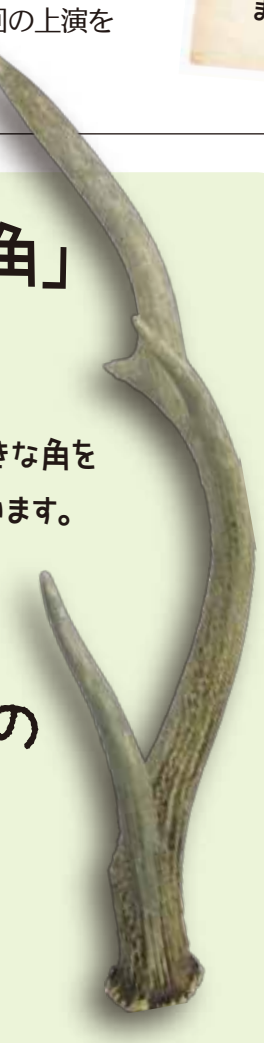
「人は誰でも懸命に心を発信している。だから、人間への尽きることのない好奇心と愛情の物語を描こう」と願って生まれた舞台『ヘレン・ケラー』が、この舞台の故郷である学園に帰り、いま生きているみんなの心と混ざり合って、また新しい力や勇気を得たように私は感じました。

出会いや思い出、感触や匂いを、人は少しずつ、ひとつずつ身体に蓄えていると思います。つらくて、苦しくて、くやしくなった時には、その心と身体に刻まれた細胞たちがきっと支えてくれる、つらさもくやしさも一生懸命心を発信して、つながりを求めている証拠だと、どうぞ忘れないでください。

新型コロナウイルスで演劇の開催がとても難しい時期に、出会いを与えてくれた信楽学園のみなさん、演劇にとって大切なことを私たちに教えてくれた生徒のみなさんに、心から感謝しています。そして信楽学園のみなさんの笑顔と、これからの元気な歩みをいつまでも応援しています。また会いましょう!

ヘレン・ケラー役　白根有平

芝田春香さんの「鹿の角」



私が長野県の山奥で酪農をしていた時に
初めて自分で拾った鹿の角です。
動物がすきなので、 いつも遠くに見える鹿の大きな角を
実際に触れた事がとても嬉しかったのを覚えています。
現在は愛犬が気に入っていて、
毎日かじっておもちゃになっています。

職員の宝もの

重田直美さんの「きもの」

私の宝物は、家族（犬も）、仲間などたくさんありますが、今はまっている着物を紹介したいと思います。 若い頃、お茶を習っていた時にはよく着ていましたが、その後はダンスの肥やしとなっていました。

しかし、数年前に義兄が呉服業を終う際、娘と自分の着物を作ったのをきっかけに、気軽にきれいに着ることができるようになりたい娘と一緒に着物の着付け教室に楽しく通っています。

編集後記

この１年を振り返ると今年はコロナ感染症におびえる毎日であります。現在ではこの状況との向き合い方なども理解出来てきた部分もある為、比較的過ごしやすくなってきたかと感じますが、油断せず気を引き締めながら毎日を過ごしています。

そんな中、今年度から進路担当をすることになりましたが、今年度は特に厳しい年であったと感じました。今までのセオリーにのっとり支援を進めて行こうにも、全く予想できない状況の中、日々奮闘し、職員も焦るし、児童も焦る。結果としてはお互い無我の境地でした。焦りや苦しみというのは児童には見抜かれてしまい、いくら自分が空元気であっても「大丈夫なん？」と声をかけてくれる児童がいました。いつもそんな事言わないような児童が言ってくるものですから、ひっそりとそのやさしさに涙していたのは内緒の話です。

自分はこの状況で何が出来るんだろう？と人や社会に思いを馳せるのですが、まずは「自分のこころを守る」事に取り組んでいます。コロナが社会に与えた影響は計り知れないものがあります。自分は大丈夫なんて言っていてもやっぱりどこかでその衝撃を受け止め切れていない部分があります。はっきり言ってこの事態はキャパオーバーです。だからこそ今一度自分のこころを大切にしてほしいと思っています。

この事態にも始まりがあれば終わりも来ます。終息後は目まぐるしくまた世界は動き出していく事と期待しています。その再スタートの時に全力で走りだせるよう、自分自身を見失わないようにいてください。

最後に原稿執筆を頂いた方々にこの場をもってお礼を申し上げます。ありがとうございました。　【安藤　宗純】

信楽学園 ニューズレター Vol.12
Newsletter from Shigaraki Gakuen
編集・発行■ 社会福祉法人 グロー
glow ～生きることが光になる～
www.glow.or.jp
滋賀県立 信楽学園
〒529-1812 滋賀県甲賀市信楽町神山４７０
☎0748-82-0051 / email : shigarakigakuen@glow.or.jp
デザイン■ 上垣 智史／mdf design